

発行所 カトリック長崎大司教区 広報委員会
発行人 大 水 文 隆
〒852-8113 長崎市上野町 10-34
カトリックセンター内
TEL095(843)3869 FAX095(843)3417
郵便振替番号 01880-5-2699
カトリック長崎大司教区ホームページ
http://www.nagasaki.catholic.jp
印刷所 株式会社 藤 木 博 英 社
〒850-0852 長崎市万屋町 5-13
TEL095(821)2146 FAX095(821)2148



9月・教皇さまの 意向のために祈りましょう

- ①一般の意向：政治にたずさわる人びと
- ②宣教の意向：最も貧しい教会のための援助
- ③日本教会の意向：子どもを育む家庭

原爆の日67年目の平和旬間に祈る わたしを 平和の道具にしてください



広島と共に祈る

8月6日午前8時から、浦上教会被爆マリア小聖堂で、広島の原爆投下時刻に合わせて「原爆・すべての戦争犠牲者追悼ミサ」が行われ、集まった約50人が犠牲者のため、また平和への願いを込めて共に祈った。

このミサは教区福音化推進部平和推進委員会の提案で、広島教区カテドラル幟町教会でのミサと、

マリアと共に歩む

同じ時間に同じ典礼で行われた。子供たちの姿も多く見られる中、静かな熱い祈りが長崎の地からもささげられた。

67年目を迎える8月9日長崎原爆の日、平和祈願祭(教区・同実行委員会主催)が行われ、長崎市の平和公園から被爆マリアと共に歩むたいまつ行列と浦上教会

平和旬間 関連行事

7月29日 教区平和推進委員会主催の「原爆資料館じつくりツアー」が行われ、参加者は資料などを通して学びを深めた。

平和の伝達者となるために

100歳まで生きんばよ」と言うと、『あと5年もや』という返事。未だに亡くなられたことが信じられませんか」

仲知主任時代、神学生として指導を受けた故島本要大司教も「豪快さと優しさで厳しさが三位一体となった司祭」と評し、恩人への訪問を欠かすことがなかった。

通夜と葬儀ミサの参列者は神と人との前で裏表のない、69年にわたる司祭生活を全うした故人の永遠の安息を祈った。



ガブリエル 西田 忠 神父 帰天

日、大浦天主堂で司祭叙階。同年4月南田平(現・田平)教会助任、46年12月鯛ノ浦教会主任、47年12月仲知教会主任、53年7月大山教会主任、53年79年まで教区会計、79年11月深堀教会主任、81年9月川棚教会主任。2001年4月引退。

8月19日、浦上教会信徒会館で通夜・葬儀・告別式は20日午前11時に浦上教会で高見三司大司教司式のもと行われた。川棚教会出身の山添克明神父(浦上教会助任)

は、「小学生の頃、地域の旅行に参加するため、母と日曜日のミサを欠席する許可をもらいに行きました。烈火のごとく怒り出す神父様の前で、子供のように小さくなる母。結局旅行には行けず、気まずい思いでミサにあずかりました。それでも私が神学校に入ると、帰省するたびに「馳走とお小遣いを準備してくださいました。キリストのようになつてほしい」と語った。あるとき、『神父様、

8月19日午前5時5分、急性心不全のため大司教館にて帰天。96歳。1916年5月13日、長崎市橋口町生まれ。浦上教会出身。43年3月17

のピエル・ルイジ・チェラータ大司教、駐日教皇大使ジョゼフ・チェノット大司教、日本の6教区の各司教、韓国からの巡礼団を含む約1600人が参列した。

ミサの始めにチェラータ大司教は「私たちキリスト教徒は、ただ神のうちにのみ平和の土台があり、その実現の可能性があると信じています。平和は神からの恵みです。しかし私たちの努力も必要とします」と呼び掛けた。

説教の中でチェノット大司教は「真福八端は、イエスがどう考え、何を喜び、何を優先させたかについての証言であると同時に、私たちキリスト者のあるべき姿を描くものです。『平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる』(マタイ5・9)。私たちは平和の源ではありませんが、平和の伝達者であるべきです」と説いた。短冊と折り鶴を奉納し、「強い意志を持って」平和の伝達者となる決意を新たにしました。

派遣の祝福の前に、韓国の高校生3年生李浩源(イ・ホウォン)さんの読書感想文が朗読され(教区HPに掲載)、アシジの聖フランシスコの「平和を求める祈り」を唱えてミサを終えた。

一連の集いに参加した女性らは、「私は被爆地長崎に生まれた被爆3世で、戦争も原爆も知りません。今日、自分自身で感じた平和、命の尊さ、原爆の怖さ、これらのことをいかに強い意志を持って後世に伝えなければならぬか強く感じた」と感想を語った。

カトリック長崎大司教区司祭・ガブリエル西田忠神父の逝去につきましては早速、ご丁重なる弔問・弔電ならびにご香典を賜り、葬儀の際にはご会葬・献花の弔意に接しましたうえ、各教会・修道院で故人のために祈りいただき、誠にありがとうございました。紙上をもつて代えさせていただきます。

カトリック長崎大司教区 大司教 高見 三明

カトリック長崎大司教区司祭・ガブリエル西田忠神父の逝去につきましては早速、ご丁重なる弔問・弔電ならびにご香典を賜り、葬儀の際にはご会葬・献花の弔意に接しましたうえ、各教会・修道院で故人のために祈りいただき、誠にありがとうございました。紙上をもつて代えさせていただきます。



世界平和祈り式典

5日「NAGASAKI GASA K I 平和を願うコンサート」音の響きを祈りにかえて(同コンサート実行委員会主催)が滑石教会で行われ、約300人が集まった。

5〜6日 教区平和推進委員会が「2012 広島ピース・スタディー」を実施。青少年を含む21人が参加し、高見三司大司教同行のもと広島を訪問した。

6日 浦上被爆マリア小聖堂で「原爆・すべての戦争犠牲者追悼ミサ」。8日 長崎県宗教者懇話会主催の「第40回原爆殉難者慰霊祭」が長崎市の原爆落下中心地公園で行われた。県内外から集まった各宗教・宗派の代表者たちが、原爆殉難者の追悼と世界平和を願い祈った。教皇庁のチェノット大司教の他、トルコのイスラームとユダヤ教の代表者も参加した。

8月15日、アルカスSASEB Oにおいて佐世保地区・聖母平和祈願祭が行われた。始めに、大崎保育園の子供たちによる力強い太鼓の演奏とかわい

大司教は説教の中で、平和を「戦争のない状態」という消極的な意味で捉えるのではなく、キリスト者一人一人が恵みに支えられながら、積極的に実現していくべきキリストの平和」として捉えるよう呼び掛けた。真の平和を実現するために、何ができるかを見つめる有意義な一日となった。

話会主催の「第40回原爆殉難者慰霊祭」が長崎市の原爆落下中心地公園で行われた。県内外から集まった各宗教・宗派の代表者たちが、原爆殉難者の追悼と世界平和を願い祈った。教皇庁のチェノット大司教の他、トルコのイスラームとユダヤ教の代表者も参加した。

9日 平和公園と浦上教会で平和祈願祭。15日 佐世保地区・聖母平和祈願祭。16〜18日 教区平和推進委員会が呼び掛け、浦上被爆マリア小聖堂で「原爆・すべての戦争犠牲者追悼ミサ」。

速度違反ではないかと疑いたくなるほどに、時代変化のスピードが増してきている。10年、5年どころか、一年一昔の感がある。技術は進み環境は変わり、社会も変化した。これまでの制度や体制では対応できなくなってきたのに、明るい見通しは立たず、不安と不満が蓄積している。▲改革・改善の必要性は疑いようもないが、目前の課題に右往左往するうちに根源的な課題は先送りされ、事態はますます深刻になっていく。これは何も、日本の政治状況、社会状況を嘆いているのではない。これから、我々も何かを学ぶ必要があるように思えてならないのだ。▲ああすれぱいい、こうすれぱいい、ああしてほしい、こうしてほしいと、貴重な意見や要望はあるが、それらを受け止め、検討・推進する機関が定まっていけない。それは非常に残念なことではあるが、その一方で、今こそ「急がば回れ」の時、「まず腰をすえて」計算し、考える(ルカ14・28と31参照)時ではないかとも思う。▲現状を丁寧に分析し、課題を浮き彫りにし、できることできないことを識別し、できることに力を注ぐ体制を整えること。そこで最も重要なのは、たとえ必要性があつたとしても、実現困難なことを大胆に放棄することだろう。英断とは、しばしば、やり続けることではなく、止めることを決断するものなのだ。

(S)

ほしかげ



1000号と信仰年の取り組み
長崎を貫く道を見いだすために

「主がお入り用なのです」

三ツ山の子ろばより

広報委員長 大水 文隆

神が用意された「時」

もうすぐ1年がたとうとしています。2人の先輩司祭が、大分教区と広島教区の司教に任命・叙階されました。慣れない土地での司教職という大きな恵みと責任。それでもこの重荷を下ろすことなく背負ったのは、「主がお入り用」(マタイ21:3)だからです。ベトファゲの子ろばのようにキリストを背に乗せ、その到着を待つ人々のもとへ運ぶためです。

「主がお入り用なのです」

この招きは、いつどこで、誰の口を通してたらされるか分かりません。その「時」は唐突にやってくる。平戸島の小さな教会で、小鳥のさえずりと園児がたたく太鼓の音に囲まれて暮らしていた私にも、その声が届けられました。司教職とは比ぶべくもない広報委員長という小さな荷物を、私も担ぐことにします。

それが手荷物に過ぎないとしても、共に歩んでくれる人がいなければ心細いものです。「来て手を貸してくれる仲間」(ルカ5・7参照)に素直に助けを乞います。そのためには、『よきおとずれ』の役割と目指すべき方向を私自身の中で確認し、整理する必要があります。幸運なことに、私は2つの機会に恵まれました。11月に1000号を迎える『よきおとずれ』の節目と、10月から始まる信仰年です。

「主がお入り用なのです」呼びかけは突然です。しかし神はいつも、ふさわしい「時」を用意してくださいます。

1000号を前にして

同じ心で

今から5年前、最初の邦人司教誕生80周年を記念して、長崎教区各地で記念講演が行われました。当時、私が働いていた平戸地区でも、パリ・ミッシン会の日本管区長シエガレ神父のお話を聞くことができました。信徒発見に立ち会ったプチジャン司教、海外の人々のために働き、彼らを田平や木ヶ津に移住させて何とか生活を築き、ようと尽力したド・ロ神父、平戸で40年も働き、多くの教会を建設したマトラ神父、その他多くの宣教師たち。

彼らの中には、この日本を訪れてから二度と祖国の地を踏むことがなかった人もいます。教会を建てるために、財産を処分した人もいます。自分の人生も持ち物も、すべて日本のためにささげ尽くされた方々に、私たちはただ感謝するばかりです。講演は次の言葉で締めくくられました。

「昔、この地で働いた神父様方は、洗礼を受けないと地獄に落ちると教えてきました。宣教のために、長いひげを生やし、胸には大きな十字架をつけ、いつもスータンを着て、司祭であることに知らせようとした。それは現代に生きる私たちにとっておかしいと思うかもしれません。時代も考え方も違うからです。しかし心は同じです。キリストを信じ、キリストを伝えたい、その心は昔の人も今の私たちと同じであるはずだ」

人の数だけ生き方があり、また、宗教、世代、環境、職業、立場

……自分と他人とを隔て、生き方を異ならせる要素は数限りなくあります。しかしキリストによって結ばれている私たちは、違いこそが多様性という豊かな源であることを知っています。「同じ心で、一つのゴールを目指して歩む」。キリスト者の立ち位置はそこにあります。

教報の精神

最初の邦人司教である早坂久之助長崎司教の叙階から1年を経た1928(昭和3)年11月、長崎教区の機関誌『カトリック教報』が産声をあげました。発行人は後に仙台教区司教となる浦川和二郎神父。発刊の辞に次のようにあります。

「同じ親の下に同じ信望愛で生きて居る兄弟姉妹たちは同じ心であらねばならぬ、同じ心である限りは悲喜哀樂を共にするばかりでなく、同じ方針で同じ道を共に歩むのが當然である」

カトリック教會といふのが、恰度それである、世界に到る所に傳播せられて、成程人種も國籍も風俗習慣言語も異なることは異なつてゐても、自分はカトリック教徒であるといふ事實、其自身から世界に於ける同教徒と同じ心で結ばれ同じ主義方針で同じ道を歩んで居るのである……此の同じ心を一層緊密に結びつけて、同じ主義方針のもとに同じ道を辿らうとする精神、から今回吾長崎教區に此のカトリック教報なるものが生れたのである」

同じ親、同じ信望愛、同じ心、同じ方針、同じ道。『よきおとずれ』と名を変えても、その目指す先は同じです。移ろいやすいこの世にあつて、しっかりと目標を見据えるためにも、土台を築いた先人たちの声に耳を傾ける必要があります。

を「存じ」の方もいらっしやるでしょう。現状を反省し、これからの教区の歩むべき道筋を見極めるためにも、当時の事情に詳しい方々のお話を伺うことができればと思います。

信者の精神的糧の供給源であり続けた教報も、出版物統制の憂き目に遭い、7年にわたって廃刊したことがあります。終戦後、里脇浅次郎神父(後に長崎大司教・枢機卿)は再刊の辞で次のように述べています。

「今教報廢刊の辭を涙ながらに綴つた七年前の往時を顧み、筆を更めて再刊の辭を綴る現在に想を致せば、まことに感無量なるを覺ゆる。……復活した教報紙は細かながら微力を盡して……魂の尊嚴とキリスト教的生活を擁護し、教區民の心の良き友となるべく努めるであらう」(1948年4月15日号)。

カテケージス、神学、黙想、聖人伝、殉教者の記録、説教。復活したその紙面には、同じ心へと招く教報の精神が息づいていました。7年間の沈黙が育んだ深い霊性を、過去に埋もれさせたままにすることはできません。歴代の教区長の記憶と共に、紹介する場を設けたいと思います。

信仰年にあつて

教皇の招き

「神父様、公教要理はまだ変わつたらんとすよね」司祭に叙階されて間もなく、親戚のおばあちゃんに尋ねられました。

「まったく変わつたらんですよ」そう答えると、彼女は安心したように大声で言いました。「あーよかった。小さか頃に覚えた公教要理が、こんな年になつてやつと分かるようになったんですよ。神様は本当のことば教えてくださったとすな」

90歳になる彼女の心配も一つとなくなつています。教区民が教会には多くの変化があり、また、背中を向けてミサをささげ

ていた司祭が正面を向き、共に祭壇を囲むようになりました。言葉もラテン語から日本語になりました。1冊丸ごと暗記させられていた一問一答の「公教要理」も、今ではあまり使われなくなりしました。しかし、外面的に教会の姿がいくら変わろうと、決して変わることはない大切なものがあるはずです。

「人にとって最も大切なものは何ですか」「人にとって最も大切なものは、宗教であります」「宗教とは何ですか」「宗教とは、神に仕える人の道であります」幼い頃、最初に習った要理問答です。洗礼によって信仰の門に入り、生涯にわたって続く旅に出発した私たちは、信仰年にあつて、この「道」を再発見するよう招かれています(教皇ベネディクト16世自発教令「信仰の門」1参照)。

さらに「修道会と小教区共同体、また昔からのものと最近のものを含めたすべての運動団体は、『信仰年』の間に『信仰告白』を公に行う方法を見いださねばなりません」(同8)。

ワレラノムネ アナタノムネト オナジ

「神様は本当のことば教えて

くださったとすな」90になってやつと分かったと言った素朴な老女の信仰とは何でしょうか。「こんな年」なるまで様々な変化に戸惑いながらも、「途に歩んできた彼女の道とは、どのようなものだったのでしょうか。彼女の告白を聞いたとき、なぜかそこに本物の長崎があるような気がしました。時折、長崎が長崎らしさを棄てているように感じることはありません。それは私の思い込みでしかありません。はつきりとした根拠があるわけはありません。ただそう感じるだけです。しかし、時代を超えてこの長崎の教会を貫く「道」を捜し求めているのは、私だけではないはずです。

「信仰者は、信仰を他の人から受け取りました。それを他の人に伝えなければなりません」(カテキズム166)。京都から長崎へ引かれていった殉教者に触れて、多くの人が信仰の門に入ったこと。パリ・ミッシン会の司祭が、彼らに献げられた教会を建てたこと。彼らの列聖の3年後、この教会で奇跡の出会いがあったこと。神が整えてくださった人と時と場所。命を懸けた信仰の受け渡し場面を

とを望んだからでした。今、献堂50年あるいは100年を経た教会堂の維持、管理の困難さがある中で、もう1つの教会づくり、キリストを中心とした共同体づくり、すなわち小共同体づくりが言われるゆえんでもあります。教会堂がご聖体を中心とした共同体である一方、小共同体は聖書を中心とした共同体づくりとなります。聖書を用いるのはそのためであり、聖書を祈り求めるのは私たちの五感を研ぎ澄ますためであります。十字架それはキリス

振り返るとき、そこに一本の道があることに気付かされます。浦上キリシタンたちが「旅」した道も、今に生きる私たちがたどる道も同じであるはず。信仰年が始まる来月から1年にわたり、「長崎はなぜ長崎を棄てるのか」と題して連載を企画しています。長崎が棄ててきたものの得てきたもの、そしてそこを貫く道を見いだすための一助となることを願っています。3年後には信徒発見150年という記念すべき節目を迎えます。その準備として教区シノドスも控えています。共に同じ道を歩む」ことを意味するシノドスは、単なるイベントではありません。「ワレラノムネ アナタノムネト オナジ」迫害時代を生き抜いたキリシタンと共に、「オナジ」と宣言する信仰告白です。

記念の年に向けて、広報委員会として果たすべき役割を考えたいと思います。

信仰者の合い言葉

エルサレム入城にあたり、イエスは2人の弟子を使いに出されます(ルカ19・28〜36)。彼らが言われた通り、ろばの子を

長崎教区の再出発

2014年、教区代表者会議(教区シノドス)に向けて



小共同体について 4-(4)

シノドス事務局 小瀬良明

小共同体という言葉に、多少の違和感を持たれる方もおられるかもしれません。要するに建物中心の教会づくりから、人中心の教会づくりをするということ。間の出会いの場となるこ

とを望んだからでした。今、献堂50年あるいは100年を経た教会堂の維持、管理の困難さがある中で、もう1つの教会づくり、キリストを中心とした共同体づくり、すなわち小共同体づくりが言われるゆえんでもあります。教会堂がご聖体を中心とした共同体である一方、小共同体は聖書を中心とした共同体づくりとなります。聖書を用いるのはそのためであり、聖書を祈り求めるのは私たちの五感を研ぎ澄ますためであります。十字架それはキリス

ト、キリストそれは愛です。愛を中心とした共同体、それが教会です。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」(マタイ18章20節)

神のことばと聖体によって養われ、「地の塩」「世の光」としてこの世界に味付けし、照らす使命を持つ共同体。秘跡を通して強く結ばれる神との絆、信仰者同士の絆が生活の中へ広がること。それこそが教会です。以上のような考えから、本部組織を充実させ、聖

書愛読運動、そして小共同体づくりを推し進めることとなります。それは、私たちの先祖が命を懸けて守り伝えてくださった信仰を、信徒発見150周年を迎えるに当たり、もう一度見つめ直し、誰一人として滅びることを望んでおられない神のご意志を実現するところにあります。

シノドス事務局は不備な点も多々あることと思ひます。しかし、広い心で受け止めていただき、長崎教区の今後の発展のためにご協力をお願いいたします。



黒崎小教区 「岩屋山」に3回お参りすれば「赤岳」に1回参詣したことになる

「岩屋山」に3回お参りすれば「赤岳」に1回参詣したことになる。赤岳に3回参詣すれば、ローマに1回参詣したことになると、潜伏時代のカトリック信者の間に言い伝えられていたといわれる。

その赤岳の西側斜面に黒山地区があり、幅2.1km程の小さな流れをはさんで黒山と西黒山に分か

黒山教会

ローマとの絆を
育んだ黒山の信心



巡回教会めぐり

17

れる。東黒山(佐賀藩)は曹洞宗の天福寺の檀家に入り、西黒山(大村藩)は三重にある浄土真宗の少林寺の檀家となっている。

明治の初め、西黒山の8戸がカトリックになり、今は高齢化と他地区への移住によって、日曜日のミサに集まるのも難しくなっている。

第2と第4日曜日の午前11時からミサがささげられている。

女部屋と呼ばれた修道院の跡に、1924年に教会が建てられ、同年8

月12日にコンバース司教によって献堂された。現在の教会は82年入りの増築と93年に屋根の葺き替えが行われた。黒崎小教区主任・大山繁

滑石小教区

家庭の霊性を中心に
さくらの里聖家族教会

さくらの里聖家族教会は、ほとんどの住民が仏教を中心として生活している。漁師町、三重地区の三重中学校の真上に2004年9月4日献堂された。島本要大司教の意向で「周辺地域の司牧と宣教のためミサと祈りの場を」との目的で建設され、また近隣の団地群からな



る地域性を踏まえ、「家庭の霊性」を中心とした将来の小教区づくりを考慮して「さくらの里聖家族教会」と命名された。堂内正面の十字架のキリストは「日本の初代教会と殉教者の霊性」をもとに製作され、島原教会で使用されていたもの。迫害を耐え忍んだ島原半島のキリシタンと殉教者にあやかれるようにと、同教会に設置された。最近では野外敷地を一周する十字架の

島原小教区

殉教者と自然の
美に抱かれた教会

緑の中に赤れんがのコントラストが映える建物、カトリック雲仙教会です。日本で最初にリゾート地として指定された雲仙の地に、威厳と優しさを持ったように建っています。

205福者の一人アントニオ石田をはじめとする殉教者に献げられた教会は、教皇ヨハネ・パウロ2世の来崎と、ヨゼフ里脇浅次郎枢機卿の司教叙階銀祝を記念して、1981(昭和56)年6月15日、里脇枢機卿によって祝別・献堂されました。



色鮮やかなステンドグラスには、3つの組の働き、「聖母の組」「慈悲の組」「聖体の組」と呼ばれた信徒による活動グループの様子が描かれています。

雲仙地区の信徒は5世帯と少ないですが、早春はウグイスの声、ホトトギスの声を聞きながら幸福な祈りの時間を持つこ

とができ、春はミヤマキリシマ、秋の紅葉など、四季折々の美しさに包まれます。

香典返し

長崎コレジオ
山崎トイ様(出津)
故ペトロ山崎政雄様
長崎カトリック神学院
山崎トイ様(出津)
故ペトロ山崎政雄様
●山崎トイ様(出津)
故ペトロ山崎政雄様
●谷口様(黒崎)
故マリア谷口フミエ様
●田川健哉様(黒崎)
故ペトロ田川健次様

右の方々から、神学生養成などのために香典返しに代えてご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げますとともに、故人のご冥福を心からお祈り申し上げます。

10月6〜8日の3日間で行われる長崎大会について、お知らせします。長崎で3度目となるこの大会は、今回「正義と平和」の原点を探る」をメインテーマに開催されます。大会が大きくなり、正義があまりにも前面に出てしまつて、一般信徒たちの参加が、特に長崎で得られない現状を打破するために行われます。

正義と平和全国集会・2012 長崎大会に向けて

大会は大司教館、カトリックセンター、浦上教会をメイン会場に行われます。申し込まれて体験されることをお勧めします。が、講演会などは自由に参加できます。是非、おいでください。そして、自分の信仰に刺激を受けてくださると思います。

8月19日、黒島教会はマルマン神父没後100年と教会献堂110周年を記念するミサを行いました。大瀬良直人主任神父と信者たちは、高見三明大司教と共に教会近くにあるマルマン神父の墓を訪れて祈り、その後、教会でミサをささげた。

大司教は説教の中で、「イエスは十字架によって全人類を救ってくださった。そのイエスの愛を実行したマルマン神



人生の最後をささげた地で マルマン神父没後100年ミサ

父は、まさしく愛の騎士だった」と話した。黒島出身のシスターは、「マルマン神父様は信仰の父であり、抛り所です」と力強く語った。没して100年を経てもなお、マルマン神父の精神は多くの召命を通して受け継がれている。

家庭は召命の苗床

黒島と井持浦で親子キャンプ



召命は親子の思いが一致してはじめて生まれる。教区召命促進委員会(岡秋美委員長は「第

3回召命親子キャンプ」を黒島教会(7月30〜31日)と井持浦教会(8月6〜7日)で開催。親子、スタッフら合わせて総勢59人が参加した。黒島では釣りや磯遊び、バーベキュー、名物の豆腐と饅頭作り、黒島の子供たちとのドッジボール大会、井持浦ではレクリエーションや花火、教会近くで海水浴をするなど楽しんだ。



井持浦

その後、伊王島の馬込教会の建設や沖縄での宣教に携わり、97年、現在の佐世保市にある黒島に赴任。着任とともに聖堂の新築を計画した。聖堂は5年後の1902年に完成し、6月10日、クザン司教によって献堂された(1998年、国の重要文化財に指定)。

信仰年によせて

～聖母マリアとともに祈る～

日時	2012 年 10 月 27 日 (土) 13:30 ~ 16:30
会場	カトリックセンター2階 大ホール
講師	山口雅稔神父
内容	コンベンツアル聖フランシスコ修道会 けがれなき聖母の騎士会 日本国内霊的補佐司祭 講話・祈り・ミサ *入場無料* どなたでも参加できます。
主催	けがれなき聖母の騎士会 後援: カトリック長崎大司教区
協賛	コンベンツアル聖フランシスコ修道会、聖母の騎士社
問合せ	095-825-2075 (納富まで) 火・木・土 10時~17時

寄付

長崎カトリック神学院
匿名様(木鉢)

右の方からご寄付を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

従うものとなりました」

10月7日(日)13時〜15時
有馬川殉教記念碑前
(南島原市・北有馬庁舎
向かい)
問合せ先・島原教会
Tel 0957(62)2952

信仰において障害を受け止める

第11回力障害30周年記念名古屋大会



7月14、15の両日、名古屋市中で第11回日本カトリック障害者連絡協議会30周年記念名古屋大会(同実行委員会主催)が開催され、12教区からボランティアを含め約440人が参加した。

参加者の一人、浦上教会所属の日田陽子さん(45)は、「初めて参加して、全国にさまざまな障害の方がいること、そして皆が同じ信仰のもとに集まっていることを実感しました。分科会ではいろいろな悩み、胸に抱えている痛みを聞いたりしました。だけど(障害があることは)不便ではあるが不幸ではない。私は足が

不自由ですが、心の足で歩んでいくたくましさ、力、喜びをあらためて感じました。乗り越えていく力を受け、カトリックでよかった。カトリック「喜び。家族や子供たちに伝えていきたい。大きなことはできませんが、今回一緒にいった仲間と何か長崎から種をまいてできたら、と話しました。巡礼のような時間を過ごすことができ、感謝します」と話した。

キリシタンの愛の伝統に学ぶ

平成24年度ヴィンセンシオ会総会



午前中は長崎純心大学教授の片岡瑠美氏(写真)による基調講演「日本キリシタンの愛の伝統―慈悲の所作―」が行われた。講師は、1244年イタリアのフィレンツェで創設されたミゼリコルディアから、日本における慈悲の組の始まりの歴史について話した。

午後からは、活動報告と具体的な震災支援についての検討がなされ、高見三明大司教司式のミサをもって総会を終了した。

マリアの丘から愛を込めてV

平和を祈る音楽朗読会

平和の尊さ、命の大切さを語り継ぐ音楽朗読会「水の会」主催。が8月4日、城山教会で開催された。5回目を迎えた今年、長崎カトリック神学院の神学生(南山高1年)6人が初めて参加した。この日の朗読作品は畑島喜久生作「ナガサキの花」(朗読・ながさきの水)の会、長崎源之助作



被爆マリア像の絵に込められた思い

土と平和の願いを練り込んで

長崎県美術館で8月8、12日に開催された「第33回ながさき8・9平和展」(同企画委員会主催)に、ポランド・アウシュビッツ収容所から持ち帰った土を絵の具に混ぜて描いた被爆マリア像の絵が展示された。



作者は、昨年「ヒバクシャ地球一周 証言の航海(国際交流NGOピースポート)」に参加した深堀 柱さん(82、城山教会所属)。航海中、アウシュビッツ収容所に立ち寄った際、同収容所で亡くなったコルベ神父をし



エリザベット 坂本タツ修道女 (お告げのマリア修道会)

8月4日、長崎市のカトリック中央診療所にて帰天。96歳。長崎市東出津町で生まれ、1936(昭和11)年、出津修道院に入会。カトリックセンターでの2年間の奉仕後、養護老人ホーム聖マルコ園の寮母として勤務する傍ら、

白蟻調査無料・駆除工事5ヶ年保証付
白蟻防除施工士
大田白蟻研究所
代表者 マリア 大島 睦子
(〒850-0811) 長崎市矢の平1丁目14番15号
☎長崎 095-822-8436
FAX 095-822-8488

ハマチ・タイ養殖、アジ・イワシ加工、中型旋網
エテルナ・ワコー(株)
代表取締役 ミカエル 溝口 美義
〒858-0926 佐世保市大湯町586
TEL (0956) 47-4380

砕石・栗石・港湾用捨石一式生産販売
たつみ産業株式会社
西田商事株式会社
代表取締役 ミカエル 西田 剛
本社 〒857-1166 佐世保市木風町1468番地
TEL (0956) 31-8268

主の平安
カトリック式葬祭・飾付一式
(有) 栄光式典社
代表取締役 ヨハネ 西村 勇二
長崎市辻町7-18 TEL (095) 844-4011
24時間営業 FAX (095) 843-9896

当社オリジナル商品
一筆箋(教会編) 定価350円(税込)
各種印刷物のお見積りも無料です。お気軽にご相談下さい。
九州印刷株式会社
代表取締役社長 トマス 川原 保夫
〒852-8103 長崎市緑町4-5
TEL (095) 846-6844 FAX (095) 846-6845

主の平安
五島中央会館
五島式典社(斎場)
代表取締役 ヨゼフ 浦 昭
24時間営業
五島市上大津町 1385 番地 1 TEL (0959) 74-5551
FAX (0959) 74-5552
五島市奈留町浦 1899-1 TEL (0959) 64-3101
FAX (0959) 64-3102